

創建

そうこん

2013・12・12 VOL.49 NO.3 (通巻148号)

巻頭言：濱田幸雄・1
 手塚貴晴氏講演会聴講報告・2～3
 設計を考えるシンポジウム聴講報告・4
 JIA東北建築学生賞／笠間稲荷コンペ・5
 安積黎明高校現場見学ほか／インド紀行③・6
 日本建築学会大会発表論文ほか・7
 学術論文／教室ニュース・8

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

入学試験の時期を迎えると、受験生から「ロハス」という言葉をよく耳にする。「工学部の建築学科を志望した理由は？」「貴校のロハスの工学に興味がありまして...」。受験生が口にする「ロハスの工学」は入試パンフレットに書かれている程度のものであるが、何か面白そうだという思いは伝わってくる。このような受験生を受け入れる私たちの側の用意はどうだろうか？そんな思いから「ロハスの工学」と建築学の関係について述べてみようと思う。

「ロハスの工学」が工学部の教育・研究方針とされたのは1999年のことである。2002年に次世代工学研究センターが整備され、2003年には環境保全・共生共同研究センターが設置された。2008年からは機械工学科の加藤教授を中心に、「ロハスの家研究プロジェクト」が始動し、「ロハスの家1号～3号」が建設された。このような研究拠点整備に対応して、工学部研究委員会で「ロハスの工学」のロードマップ作成作業が進められている。ここでの「ロハスの工学」の定義は、「健康で持続可能な生活スタイルを実現するための工学であり、震災、原発災害と風評被害から、自立した復興を実現するために必要となる工学である」と。郡山の地にある大学として、工学的側面から地域の復興・発展に積極的に参加しているという決意を込めたものである。

ロハス (Lifestyles of Health and Sustainability) という言葉は、1990年代後半にアメリカのコロラド州ボルダー周辺で生まれたビジネス・コンセプトといわれている。アメリカでは1962年に、レイチェル・カーソンが「沈黙の春Silent Spring」*を著し、自然破壊、化学薬品が生物に与える影響を指摘している。この本の影響は大きく、故ケネディー大統領は大統領科学顧問団の生物科学委員会に殺虫剤危険調査を命じ、1963年に公表された「ウィースナー報告」によりカーソンの主張が確認されて

いる。しかしながら、現在も世界のほとんどの国で、化学薬品である殺虫剤は大量に使われている。このような状況を黙認している国の政策と地球環境の持続性に危機感をもつ人々が、ビジネスを通じて新しい価値観の創造を志したのがロハスの始まりとされている。経済的側面から見れば、このような価値観をもつ人がアメリカには5000万人存在し、彼らの消費市場は30兆円に達すると試算されている。

単なるビジネスモデルであれば、世界的にこれほど注目されることはなかったと思われる。産業革命以降、膨大な地球資源を消費することによ

「ロハスの工学」と 建築学

教授 濱田幸雄

り生活を豊かにしてきた人類は、地球資源の枯渇、地球温暖化による異常気象に直面している。土壌は農業に汚染され、地下水の汚染も静かに進行している。土壌が汚染されることは、私たちの生活基盤そのものが失われることを意味する。さらに、日本では急激な高齢化と少子化が進んでいる。このような状況を目の当たりにし、ようやく人々は持続可能な生活が今のままでは継続できないことに気づいたといえる。建築の基本は、風土に根ざして環境と共生する居住環境を創造することにある。つい最近まで、建築環境工学は人が快適に暮らせる空間の創造を目的としてきた。今を生きる私たちは、人が快適であるためには、美しく豊かな自然環境が周囲に存在しなければ成り立たないことを認識している。人が生きていくためには、地球上のありとあらゆる生物が存在し続けな

ればならないことを多くの人が感じている。私たちの周囲に広がる環境には、数え切れない種類、個体数の生物が存在するが、それらは何億年という時間のフィルタを通して相互依存関係を構築し、私たちの目の前に存在している。いわば不必要なものなど無いのが自然なのである。

私たちが引き続き地球上に存在するためにはどうしたらよいのだろうか。2007年にEUでは「第三次産業革命の経済行動計画」を採択・宣言している。ここでは、自然エネルギーとネット社会が結ばれる水平パワーが第三次産業革命を引き起こし、エネルギー・経済・政治・教育・意識を変えるとされる。従来型の大量生産、大量消費、使い捨ての生活スタイルから健康で持続可能な生活スタイル、つまりロハス社会への変更を宣言したものと見える（具体的な内容は、2011年に発刊されたリフキン・ジェレミー著、「第三次産業革命—原発後の時代へ、経済・政治・教育をどう変えていくか」に詳しく紹介されている）。社会システムをどのように変革させるかは政治家にお願いして、建築に携わる私たちは何をなすべきなのか。2000年に国内建築関連5団体が宣言した「地球環境・建築憲章」には、長寿命、自然共生、省エネルギー、省資源・循環、継承がキーワードとして挙げられている。建築学は工学である以上、具体的に「もの」を造り出さなければならない。しかしながら、その根底にあるものは社会システムが変わり人の価値観が変わっても、地球上の生物を慈しむという普遍的な価値観なのだと思う。

「ロハスの工学」は持続的発展を遂げる社会をもたらすのか、今を生きる私たちに懸かっていることだけは間違いはない。

*レイチェル・カーソン著（訳：青樹 築一）『沈黙の春』が新装版として新潮社より出版されている。

手塚貴晴氏講演会聴講報告

平成25年9月28日(土)に「設計のプロセスを語る／設計の意味と役割」と題して手塚貴晴先生(東京都市大学特任教授・建築家)による講演会が7014教室にて開催され、学生200名と一般参加者40名が参加した。この記録を学生の聴講感想に基づき紹介したい。

手塚貴晴先生からの問いかけ

4年次生 樋口 卓史

去る9月28日(土)に工学部で行われた、日本でも有数な建築家である手塚貴晴先生の講演会の日は、その後の懇親会の場合も含めて、自作やご自身が建築家になれるまでのお話などを拝聴でき、また、手塚先生を身近に触れる機会を頂戴して、とても有意義な日となりました。

手塚先生の代表作で、私自身も建築雑誌や実物で勉強させていただいていた「屋根の家」と「ふじようちえん」の2作品について、改めて先生ご自身の生の言葉でご説明や解説をお聞かせ頂くと、「アクティビティを意識すること」は当たり前の設計手法に聞こえるほど、「楽しさが全体に広がる建築」という言葉が印象に残りました。その二つの建築の使い方の紹介では、利用者が積極的に建築と関わっている、そんなシーンがたくさん生まれており、どうすればこのような空間がつかれるのか、ということ意識しながら講演を拝聴しました。前者の「屋根の家」では、家族の生活が屋根の上でつながることで、閉じられがちな生活シーンを外部に表出させる一方、周辺の都市や環境を屋根を通して暮らしの中に巻き込んで生活の中に還元する住宅で、暮らしと都市の関係のあり方やスケール感などについて考えさせられました。また、後者の「ふじようちえん」では、エンドユーザーである園児の日常に徹底して着目することで、結果的に幼稚園のプログラムまで踏み込まれている内容から、計画と設計の役割や関係性について考えさせられました。

私たち学生は、現在それらのトレーニングをしていると考えた時、普段取り組んでいる設計演習をはじめ様々な授業の中で、言葉やプログラム、コンセプトを考え、スケッチや図面を描く際に、手塚先生がご紹介されたような質の高いシーンを数多く経験・吸収し、それらを想像・消化しながら手を動かすことが重要なのだと再認識させられました。

最後に、懇親会で手塚先生から「建築という枠だけに捉われず、世の中を俯瞰して見ることで、建築をつくるだけではなく社会をも変えるような提案をすることが大切」といった趣旨の言葉を頂き、色んなことが複雑に絡み合っている時代になり、「建築」と「それ以外」という考え方自体が建築の魅力や可能性をなくしてしまう面もあるのかもしれないと、今考えさせられています。

建築家・手塚貴晴氏のことば

4年次生 山本 彰記

今回の講演は、手塚先生の代表作である「屋根の家」から始まり、多くの作品が紹介されました。スライドでは、心地良さそうな空間の抜けや、そこに居る人の明るい笑顔から、その建築の豊かさが感じられました。また、流ちょうな語りと解説によって、スライドで見る建築の魅力がより伝わってきました。手塚先生の言葉には、建築と同様に人を惹きつける力があると感じました。しかし、その後の懇談会で建築の設計と言葉の関係についてお話しされた時、手塚先生が笑顔で「言葉なんて後からだよ」ときっぱり言われた時は、驚かされました。永遠のテーマかも知れませんが、設計の中で「ことば」をどのように使うかについては、今後自分なりに時間をかけて考えて見たいと思いました。

また、思い返せば手塚先生は、終始「本を読みなさい」・「旅に出なさい」という言葉を繰り返し私たちに投げかけておられ、出会いや感動する大切さを説かれていた様な気がします。建築家も人に様々な出会いを提供する者だとすれば、皆に感動を与えられるような出会いを生み出す(建築する)手掛かりは、多様な体験とその体験の中で感じた自分の内奥にある出会いにあることに気付いてほしい、というメッセージだと自分なりに解釈しました。



建築にとって大切なもの

3年次生 小林 寛大

今回の講演会は、手塚貴晴先生の建築について考えることを通じて、建築において何が大切かを学びました。

紹介していただいた「屋根の家」や「ふじようちえん」は施主さんの希望を取り入れ、楽しさを重視して設計されています。手塚先生の作品の中にはこれまでの常識、こうであるべきという考えを超えたものが多いと感じました。「屋根の家」も希望とはいえ危険なのではと保守的に考えてしまおうと、[「ふじようちえん」の木登りの木も避けてしまおうとします。

現在つくられている建築に限らず、これまでも様々な面で無駄を省いた合理化が進められてきました。危険が及ぶなら行かせないようにしたり、出歩かなくても欲しいものが手に入ったりしてしまうようになり、やらなくてよいものはやらない、やらせないといった風潮になっています。それらを助長してしまった製品や開発は人々の生活を便利にし、さらなる進化を考えて世に出されています。実際に人はそれを使いこなさず、より安全で高水準の生活を得ていて素晴らしいことだと思います。しかし手塚先生がおっしゃったように、人は危険を与えて強くなるはずであり、そして私たちは守られすぎていると感じます。無駄を取り除き、誰しもが手に入れられる安心で安全な空間は、本当に素晴らしいのかと考えさせられました。

自分たちが一生住む家を考えるとき、合理性を無視した自由な要望が出てきます。そのような要望を知識の蓄えの中で考えるとき、それに縛られてしまうのではないかと思います。私は実際にそのような部分があり、そしてそれは一般的な考えに落ちてしまうことが多いのです。しかし手塚先生はその膨大な知識から生み出したアイデアやそれを超えるモノの捉え方に、私はとても刺激を受けました。「100%の満足より120%のお気に入り」は守られすぎた生活環境から抜け出し、他の人やモノにはないことを求めることで自ら楽しみを見つけていくことができるもの、それが建築を考える上で取り入れていくものだとは私は思いました。快適な環境が必ずしも良い影響をもたらさず、「ふじようちえん」をみると木々やすり鉢状の屋上、様々な声や音が聞こえる繋がりをもった教室などは児童自らが肌で周囲の状況を感じて、知らずに協調性や仲間意識を持っていく姿が見えます。

良い環境が集まりすぎた現代では、快適ではあるが心地よさに欠けてしまうと思います。心地よさは多くのことを体験することで自ら探し当てることから楽しさに繋がります。その多くを、建築を学ぶものも経験すべきです。そして施主さんと考えを一致させるという手塚先生

のお話から、建築学の外からアイデアを生み出してくれる方々の考えを聞いたり意見を交わしたりすることはとても重要なことだとも思いました。様々な体験や人とのふれあいは、現代のこの環境を良い意味で崩していき、創造的な人や社会を生み出していきます。それらを手助けする手段のひとつに建築があると思いました。

多少無茶しても大丈夫

— 心に直接響いた言葉 —

2年次生 佐藤 幸音

今回、講演会及び懇談会に参加し、非常に有意義で様々な教えを頂き、とても充実した時間を過ごすことができました。

講演会では、今まで私が受けてきたどの内容とも異なり、事前に予備知識を持って講演に臨まなければならぬようなただ難しい言葉を羅列する講演会とは全く異なり、単純明快でわかりやすい言葉と心に直接響く説明でとても聴きやすく、理解が容易にできる講演会でした。また、ただ作品完成までのプロセスを話すだけでなく、作品にまつわるいろいろな背景を話に織り込んでテンポよく、また聴衆から笑いを引き出しながら話すなど、手塚先生の人柄がにじみ出ていました。作品の背景には様々な話があり、それらも含めて作品が創りだされることを知り、強く印象に残りました。また建築は、人々の生活から地域にまで影響を与えることから、人々の生活を変化させ、さらに交流を促すことができることを、先生の作品における設計プロセスから改めて学びました。

懇談会では、手塚先生の多くの海外経験にまつわる話を伺い、その経験の多さと密度の濃さに、さらに尊敬するばかりでした。私は海外渡航を経験していませんが、積極的に様々な経験、体験をしなければと強く思いました。「30歳までは多少無茶しても大丈夫。何とかかなるから。」という先生の言葉で、失敗を恐れずに何事にも挑戦していこうと勇気をもらうことができました。



シンポジウム聴講報告

「現代社会における設計の意味と役割を考えるシンポジウム」を聴講して

大学院博士前期課程2年 矢吹朋之

平成25年7月27日(土)、日本大学工学部と日本建築学会の共催による「現代社会における設計の意味と役割を考えるシンポジウム」と題するシンポジウムが、70号館7014教室で開催された。今年度本学部に着任された湯本先生が出版に携わられた、日本建築学会編著「建築設計のための行く見る測る考えるー発見・発想・試行のフィールドとデザイン」に基づく内容であり、学生だけではなく一般聴講者も含め約200名が参加した。

湯本先生をはじめ執筆に関わった8名の設計実務者による実際の設計体験に基づく貴重な話を聞く機会となり、話題提供された内容の豊富さもさることながら、講師の方々一人一人の建築や設計に対する多様な考え方を伺うことができ、非常に有意義なシンポジウムであった。

まず、このテキスト執筆を行った、日本建築学会情報設計小委員会主査である村上晶子氏から挨拶があった。自分にとってなじみが薄かった「情報設計」とは、設計を行為と扱う情報を含めて対象にすることであり、設計を方法と情報の二つのファクターで考察する考え方の説明を受けた。

事例講演では4名が登壇し、ワークショップを活用した設計手法について多くのエピソードを交えた話を聞いた。伊藤雅春氏は、三愛福祉会特養老人ホームの事例に基づき、具体的な生活がイメージできるテーマ設定による議論の重要性や、合意形成の基本は現場での体験を共有することなど、専門家と利用者が対等にキャッチボールできる手法が紹介され大変参考になった。

加茂紀和子氏は、「みかんぐみの小学校」と題し、長野県伊那市立伊那東小学校における設計プロセスを事例講演された。市民が参加するワークショップによって地域と小学校との関係性が設計段階から構築され、かつ市民の意見を反映させながら子ども達の居場所として多様な環境がつけられている設計手法に深い感銘を受けた。

連健夫氏は、ルーテル学院大学(村野藤吾氏設計)の増設設計について講演された。村野藤吾氏の設計意図を継承させることをテーマとし、学生のワークショップを通じて、学生の創造性を生かすとともに、新校舎への愛着心を芽生えさせる手法について丁寧に説明された。

米田正彦氏は、自身の住宅設計活動から建築の技術的要素を情報の集積として捉え、情報の様相、捉え方という概念で「アспект」を定義していた。新鮮な考え方であり、多様なアспектの生かし方にも興味を抱いた。

パネラー8名が登壇したシンポジウムでは、設計者と利用者が想いを共有できる手法としてワークショップの有効性とその成果を生かす難しさが話題となった。最後に、設計実務者から学生に向けて多くのメッセージが送られた。図面を見ながら事例を見る・小さなエスキースを重ねるトレーニング・体験からしかアイデアは生まれない、体験を充実させる・自分の感性を信じるのが大切、そのためには本物を見て歩き、スケッチする…。どの言葉も胸に響いた。建築の幅広さと面白さ、そして社会に対する責任の重さを改めて感じ、利用者目線での建築づくりに自らの感性を磨いて携わりたいと思う。



講演者
(左から順に)

村上晶子氏
伊藤雅春氏
加茂紀和子氏
連健夫氏
米田正彦氏



第17回JIA東北建築学生賞受賞者の声

優秀賞受賞 4年次生 樋口 卓史

この作品は4年の前期授業の課題で提出したものです。私が設計したのは、市民のための市役所。「都市の中のみんなのもの」というような、日常的に寄り付きやすく、市民で共有している意識を持てる公共建築にすることを大きな目的としました。東北建築学生賞では“学生らしい提案”が求められますが、私は敢えて奇抜さや大胆な提案による“学生らしさ”を省き、地元市民のために貢献できるような実現性のある提案をしたいと考えました。プレゼンテーションでは、“実現性の高さ”と“学生らしさ”をバランスよく盛り込んだ点を強調することができ、その結果として優秀賞を頂けた

ことは、大変嬉しく思います。ご指導頂いた渡部先生と浦部先生にはとても感謝しています。今後も様々なコンペに挑戦し、最優秀賞を取れるようにプレゼンテーションや提案力に磨きをかけて頑張りたいと思います。



受賞作品



筆者と指導教員

奨励賞受賞 4年次生 星 陽太郎

このたび「修験道資料館—見る・歩く・感じる—」と題する作品で、JIA東北建築学生賞奨励賞をいただきました。

修験道とは、山を師とする日本古来の山岳宗教ですが、その背後には自然を畏れ敬うことを基盤とする思想があります。そして、この自然を畏れ敬うという思想は、科学技術の進歩などによって現代人の中から失われつつあります。

今回、4年生の設計課題として与えられたテーマは復興でした。しかし、自然に対する敬意と畏怖を失ったまま形だけ元に戻したところで、真の復興にたどりつくことはできないのではないか。そう考え、修験道をモデルに、その精神を伝える建築を、郡山という都市の、人目に触れやすい市街地につくることを提案しました。

とはいえ、構想から提出に至るまでの何もかもが手探りの作業でしたから、阿部直人先生・速水清孝先生をはじめ、多くの方のご協力をなくしては賞に結びつくことはなかったはずです。お力添え下さった皆さんには、本当に感謝しています。この受賞に慢心することなく、次に控える卒業設計でも力を出し切りしたいと思います。



受賞作品



受賞作の模型と筆者

『笠間稲荷門前通りポケットパークデザインコンペ』で最優秀賞を受賞して

4年 前田建都・古俣甲太郎・三代川昌礼

今回私たちが取り組んだコンペディションは、笠間稲荷神社（茨城県笠間市）の参道入口付近にある築20年のポケットパークを改修するにあたり、学生のアイデアをデザインの参考にするという、現実性の溢れる内容でした。対象地は周辺の老舗や稲荷神社に訪れる観光客の往来が激しい場所です。そこで一次審査では、機能性と実現性、そして古からの風流な街並みと調和した協調性を最重視し、「和」をテーマとした作品に仕上げました。笠間市役所から一次審査通過の連絡を受け、現地での二次審査説明会に参加した際には、地域住民の方々がちづくり積極的に、またポケットパークへの深い愛情も感じました。笠間の皆さんの想いに応えるべく、観光PRマップのイメージづくりも併せて精力的に取り組みました。

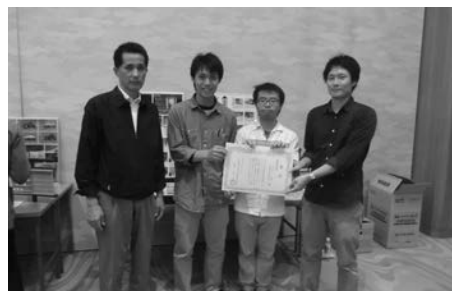
そして一ヶ月後の10月4日。二次審査では地域住民32名の前でプレゼンテーションを行いました。私たちは市民目線にこだわり、実物がイメージしやすい模型や分かりやすいPRマップの表現に力を入れて取り組んだため、住民の方々から

の反応も良く、より現実的なデザインの提案内容を伝えることができました。結果は、我々と茨城大学のチームが同票となり、共に最優秀賞に選ばれました。住民の方々から拍手が沸いた瞬間、今まで取り組んできた苦勞が吹き飛び、達成感と充実感に満たされました。作品はしばらく商店街に展示されると聞き、多くの人に見てもらえることを光榮に思います。その後も、笠間の菊まつりや伊東豊雄先生の講演会に参加するなど、何度か笠間市を訪問し、伊東先生が出席される交流会にも参加する貴重な機会にも恵まれました。

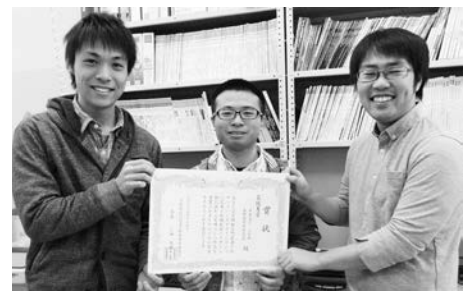
今回のコンペディションでは、現実的な建築の手法や、建築を通したまちづくりの援助など様々なことを学びました。何よりも協力し合っ一つのものをつくるモノづくりの醍醐味を経験でき、また研究室の連帯感も深まりました。最後に、私たちの設計に力を貸して下さった多くの皆様に心から感謝の気持ちを伝えたいです。今後も建築と真摯に向き合っていく学んでいきます。本当にありがとうございました。



第二次審査での作品展示



笠間市長との記念写真



研究室にて

福島県立安積黎明高等学校災害復旧工事現場見学会

郡山市の福島県立安積黎明高等学校災害復旧工事の現場見学会が福島県県中建設事務所の協力の下、10月25日に開催され、建築学科1～3年生の有志24名が参加しました。中には、久しぶりに母校を訪ねた女子学生もおりました。

まずは、県中建設事務所の方が工事の経緯を写真スライドを使用して説明されました。県中建設事務所は県の機関ですが、今回説明された方は山口県から震災復興支援で福島に派遣された職員と伺い、復興がまだまだ道半ばであることを感じました。

実際に工事現場を視察すると、バリアフリーの建物であっても多くの段差がみられました。これは、仕上部材の厚みに合わせた様々な寸法の違いが、下地の段階では段差として表れているとの説明を受けました。完成すると壁や床の中にあるため、実際は見るできない配管や下地材に対しても丁寧に施工していることや、建物のあらゆる所に基準の位置が採られていることを知り、施工の難しさと楽しさを学ぶ機会となりました。また、二次部材といわれる天井の吊りものや配管などの耐震性を高くする施工方法や、工期の短縮を可能とする高品質の材料選定など、現場でしか伺うことができない多くの話を聞くことができました。最後には発注者側の県職員としての立場と受注者側として立場、双方の仕事の違いや苦勞、やりがいなどについて、貴重な生の声を聞くことができました。



第60回日本大学全国高等学校・建築設計競技

今年度第60回を迎えた日本大学全国高等学校・建築設計競技の幹事校を工学部が務めることとなり、審査員長には、本学科の設計教育を永年にわたり指導されている建築家の渡部和生先生にお願いしました。第60回に相応しく、かつ被災県にある工学部から高校生へのメッセージが伝わる内容をと検討した結果、「つながる家」というテーマに決まり、審査員長による課題主旨に「情報に満ちあふれている中で孤独感が広がらないように、建築を通して、皆さんのつながるイメージを思い描いてみませんか。」とあるように、高校生が考える多様なつながりを表現できる課題設定を行いました。また第60回を記念し、今まで応募対象ではなかった高等専門学校生に対し、3年次生までに限り応募資格を拡げました。その結果、200件の応募があり、多くの力作が寄せられました。

9月10日の第1次審査の結果、優秀賞に選定された6名が、11月9日に開催された第2次審査では最優秀賞を争うこととなりました。

いずれの作品も甲乙つけがたく、またプレゼンテーションも作品への思いに溢れた熱意ある内容でした。結果的には、実際に田んぼを維持する難しさに思い悩む祖父を日頃から気にかけていたことに基づいた、田んぼを中心とした新たな働き手とともに田んぼで繋がるコミュニティを住まいとして計画した作品が最優秀賞に選ばれました。交流会では、優秀賞受賞者6名の高校生の中に共に戦った絆と友情が生まれていたことを知り、そのつながりこそが今回のテーマである「つながる家」であったと気づかされました。

文責：市岡（設計競技委員会委員）

終・日本人建築学生のインド留学記

大学院博士前期課程3年 三浦 洵

最後の寄稿になる今回は、インド留学中の研究活動・生活の総括について記します。前回のご報告の通り、6月から約4ヵ月間インド各地を飛び回り、3つの気候区分に建てられた伝統的住宅の実測調査及び環境測定調査を行ってきました。各地域に共通して、その地域で比較的容易に入手できる素材を用いて風土に適応しながら、出来る限り快適性を得る技術・知識を見ることができました。例えば、日射が強い区分では建物を高く高密度に密集させ、表面積の減少、影の形成によって躯体への蓄熱を最大限減らす設計をしています。湿度が高い区分では通風を意識した開口部の設定や日本の伝統的住宅に見られるような深い庇などを有しており、また極寒な区分では日射を取り入れつつ熱を逃がさない繊細な設計を意識して建てられています。今後は修士論文に向けて、そのような主に温熱環境に着目した分析を行い、インドにおけるパッシブデザイン住宅の提案に加え、それらの技術・知識の我が国の住宅への逆提案の可能性を模索したいと考えています。

さて、そんな約1年間の生活を送ってきたインドを一言で説明するならば、常識を疑う機会を我々に与えてくれる国、と言えるのではないのでしょうか。インドでは色々な事柄が、兎に角、多様で、宗教はもちろん、地域によって言葉、伝統、文化が国内で異なります。また、富裕層もいれば、家がない貧困層も同時に存在します。結果、様々な事柄が混在するインドは、先進国の常識から遥かに逸脱したことが日常的に発生しています。それを「インドだから」と片づけることもできますが、無意識に我々が思い込んでいる（日本での）常識という概念を揺さぶってくれる契機とも考えられます。上述した研究もそうですが、今後は、この1年間で体験し考えさせられた事柄を活用できたらと思います。



北インドの住宅 寒さの為に日干し煉瓦を厚く用いる



友人の親族一同新調した伝統衣装でお祭りを祝う

学 会 発 表

* 届け出があった記事を掲載

■2013年日本建築学会大会

日時：平成25年8月30日～9月1日 会場：北海道大学（北海道）

- ・マクロセル腐食に及ぼすポリマーセメント系補修材料の打継部長さの影響 ○飯野将広, 渡辺宗幸, 齋藤俊克, 出村克宣
- ・防せい混和材を混入したポリマーセメントモルタルの基礎的性質 ○渡辺宗幸, 齋藤俊克, 出村克宣
- ・結合材を繊維補強セメントモルタルとした繊維補強ポラスコンクリートの耐凍結融解性 ○十文字拓也, 齋藤俊克, 出村克宣
- ・エマルジョン処理竹補強材を用いた竹補強セメントモルタルの耐凍結融解性 ○八木将太郎, 齋藤俊克, 出村克宣
- ・養生方法の異なるエマルジョン処理竹補強セメントモルタルの曲げ性状 ○齋藤俊克, 八木将太郎, 出村克宣
- ・放射性セシウム汚染灰を用いた超高密度モルタル容器の γ 線遮蔽性能評価 その1 高密度モルタルの材料物性 ○Sanjay PAREEK, 鈴木裕介, 木村健一, 荒木慶一, 藤倉裕介
- ・放射性セシウム汚染灰を用いた超高密度モルタル容器の γ 線遮蔽性能評価 その2 高密度モルタルの促進中性化試験及び γ 線遮蔽性能実験 ○鈴木裕介 (京都大), 木村健一, Sanjay PAREEK・荒木慶一, 藤倉裕介
- ・3種類のコンクリートを用いた放射能による汚染物格納容器の解析的検討 ○木村健一 (株)フジタ技術センター, 鈴木裕介, Sanjay PAREEK・荒木慶一, 藤倉裕介
- ・放射性セシウム汚染灰混入モルタル供試体の放射線量変化に関する基礎的研究 ○荒木慶一 (京都大), 鈴木裕介, 木村健一, Sanjay Pareek, 藤倉裕介
- ・温度繰返しサイクルにおける各種ポリマーセメント系接着剤を用いたCFRPとコンクリートの付着性能に及ぼす影響 ○安藤祐太郎, 鈴木裕介, Sanjay PAREEK
- ・Cu-Al-Mn超弾性合金及びネットワークを用いたRC梁における自己修復機能の向上に関する検討 ○三浦裕騎, Sanjay PAREEK, 荒木慶一, Kshitij Shrestha
- ・動的縮小復元法に関する理論的研究 ○倉田光春
- ・重ね梁によるアーチ構造物の有限要素解析 ○星賢護, 倉田光春, 野内英治
- ・鋼材の1軸材料減衰に関する研究 ○高橋佑弥, 倉田光春
- ・中層RC造建物における耐震補強効果の検討 ○森玄樹, 千葉正裕, 浅里和茂, 日比野巧
- ・既存RC造体育館における鉄骨置屋根接合ボルトの破断に関する研究 ○日隈宏法, 浅里和茂, 千葉正裕, 日比野巧
- ・医局・診察室に対する医師の要求条件の調査 -病院建築の計画要件に関する研究(その6)- ○山口敏弥, 浦部智義, 上野佳奈子, 遠藤安泰, 中山誠健, 太田亮平
- ・病院内の医師の移動に関する調査研究 -病院建築の計画要件に関する研究(その7)- ○遠藤安泰, 浦部智義, 上野佳奈子, 山口敏弥, 中山誠健, 太田亮平
- ・東北6県に現存する能楽を対象として -東北地方に現存し歴史を持つ劇場空間の実態と役割について その3- ○渡邊洋一, 浦部智義
- ・梁下通過時におけるくぐり高さと頭上のアキ寸法の計測に関する検討 ○若井正一
- ・文化財級木造家屋耐震再生改修法について ハイパーフレーム工法による改修設計の試み ○湯本長伯, 森雅
- ・福島県須賀川市における土蔵の被災修復状況と景観への活用 ○矢吹朋之, 市岡綾子
- ・ローマの街路空間における探索歩行時の注視に関する研究 -その2. 探索歩行時の地図確認, 立止り, 滞留行動について- ○三浦金作, 土方吉雄, 薄井謙
- ・ローマの街路空間における探索歩行時の注視に関する研究 -その3. 探索歩行時の注視傾向について- ○薄井謙, 三浦金作, 土方吉雄
- ・景観計画推進区域における景観協定策定に関する研究 -その1 沿道建物・工作物の景観形成ガイドラインへの適合状況- ○山田瞭, 大佐古和明, 土方吉雄, 三浦金作
- ・景観計画推進区域における景観協定策定に関する研究 -その2 景観形成基準策定に対する支援方法- ○大佐古和明, 山田瞭, 土方吉雄, 三浦金作
- ・公園における移動イス設置方法に関する研究 -その2 移動イス置き場を設置した場合の移動イス利用- ○大矢康隆, 中谷哲郎, 土方吉雄, 三浦金作
- ・東日本大震災後の世帯構成の変化に関する調査研究 福島県内の2つの自治体の仮設住宅団地へのヒアリング調査分析 ○佐久間皓惟, 浦部智義, 芳賀沼整, 滑田崇志, 早川真介
- ・東日本大震災に伴う福島県の建築物の公費解体について ○速水清孝
- ・生活行為に起因する床衝撃音の測定例と標準重量衝撃源との対応 ○稲留康一 (株)奥村組技術研究所, 中澤真司, 平松友孝, 濱田幸雄
- ・重量床衝撃音遮断性能の評価に関する研究 -最大A特性床衝撃音レベルによる評価の検討- ○永澤駿, 濱田幸雄, 中澤真司, 稲留康一
- ・準寒冷地における夏・冬のパッシブデザインの統合 その1 実験棟の計画概要と基本的な温熱性能 ○宮岡大 (日大工学部機械工学科), 浦部智義, 三浦洵, 長内勇樹
- ・準寒冷地における夏・冬のパッシブデザインの統合 その2 実験棟(ロハスの家3号)における冬期室内温熱環境の実測結果 ○長内勇樹, 浦部智義, 宮岡大, 三浦洵
- ・「大槌臨学舎」新校舎の計画・設計 復興に向けての中期仮設建築の可能性 ○阿部慎也, 芳賀沼整, 滑田崇志, 田中重夫, 早川真介, 浦部智義

■特定非営利活動法人・産学連携学会 第10回大会

日時：2013年6月20日～21日 会場：岩手大学（岩手県）

- ・産学連携・知的財産活動成果反映の新しい方向性検討としての「産学連携まちづくり研究」について ○湯本長伯
- 日本イノベーションを確立するための当該政策確立の下敷-4
- 日本造園学会東北支部第12回支部大会 日時：平成25年10月26日～27日 会場：道の駅くじ(やませ土風館)風の館(岩手県)
- ・子どもたちにまち資源を語り継ぐ手法となりうる学習プログラム -福島県須賀川市におけるウォークラリーの実践- ○市岡綾子
- ・公園内における移動イス設置方法に関する研究 -移動イスの形状利用実態及び移動イス置き場を設置した場合の移動イスの利用について- ○中谷哲郎, 大矢康隆, 土方吉雄, 三浦金作

■2013日本インテリア学会第25回大会研究発表会

日時：平成25年10月26日～27日 会場：京都女子大学（京都府）

- ・福島県内に立地する屋内子ども遊び場の利用実態に関する研究 その2 ○阿部圭, 高守留珠, 若井正一
- ・米国University of OregonにおけるAllied Artsのカリキュラム ○齋藤伶, 若井正一

■The 6th Civil Engineering Conference in the Asia Region (CECAR 6)

日時：平成25年8月20日～22日 会場：Jakarta, Indonesia

- ・Large Displacement of Planar FGM Beam Structures using co-rotational Finite Element Method Buntara Sthenly Gan and Nguyen Dinh Kien

■The Thirteenth East Asia-Pacific Conference on Structural Engineering and Construction (EASEC-13)

日時：平成25年9月11日～13日 会場：Sapporo, Japan

- ・Optimization on Footing Layout Design for Residential House with Piles Foundation Buntara Sthenly Gan and Nguyen Dinh Kien

学 術 論 文

* 届け出があった記事を掲載

- ・安藤祐太郎, 鈴木裕介, Sanjay PAREEK; 「環境温度が各種ポリマーセメント系接着剤を用いた連続繊維補強材とコンクリートの付着性能に及ぼす影響」, コンクリート工学年次論文集, 日本コンクリート工学会, Vol. 35, No. 1, pp. 313-318, July 2013.
- ・飯野将広, 渡辺宗幸, 齋藤俊克, 出村克宣; 「異なる長さの棒鋼を埋め込んだ供試体の打継部の長さおよび比率がマクロセル腐食の発生に及ぼす影響」, コンクリート工学年次論文集, Vol. 35, No. 1, pp. 1105-1110, July 2013.
- ・大平旭洋, 三浦裕騎, Sanjay PAREEK; 「ネットワーク及び補修剤を用いた自己修復システムによる耐久性向上に関する実験的検討」, コンクリート工学年次論文集, 日本コンクリート工学会, Vol. 35, No. 1, pp. 1393-1398; July 2013.
- ・Kshitij C. SHRESTHA, Yuki MIURA, Sanjay PAREEK and Yoshikazu ARAKI; 「ACTIVATED NETWORK SELF-HEALING OF REINFORCED CONCRETE BEAMS WITH SUPER-ELASTIC ALLOY BARS」, コンクリート工学年次論文集, 日本コンクリート工学会, Vol. 35, No. 1, pp. 1399-1404, July 2013.
- ・齋藤俊克, 木村彰吾, 出村克宣; 「エマルジョン処理竹補強材を用いた竹補強セメントモルタルの曲げ性状に及ぼす養生方法の影響」, コンクリート工学年次論文集, Vol. 35, No. 1, pp. 1429-1434, July 2013. (年次論文奨励賞受賞)
- ・十文字拓也, 齋藤俊克, 出村克宣; 「結合材を繊維補強ポリマーセメントモルタルとした繊維補強ポーラスコンクリートの機械的性質に及ぼすポリマー混入効果」, コンクリート工学年次論文集, Vol. 35, No. 1, pp. 1435-1440, July 2013.
- ・斎藤雄仁, Sanjay PAREEK; 「インドにおけるCO₂削減を目的とした実寸大無焼成フライアッシュレンガの養生条件及び長期耐久性の検討」, コンクリート工学年次論文集, 日本コンクリート工学会, Vol. 35, No. 1, pp. 1921-1926, July 2013.
- ・浦部智義; 「福島における日常を取り戻す試み」・「小規模コミュニティ型復興住宅モデル」, 日常へ一見えない避難の現場から一, 日本建築学会2013年度大会建築計画パネルディスカッション資料, pp. 11-14, 39-40, Sep. 2013.
- ・Kshitij C. SHRESTHA, Sanjay PAREEK, Yusuke SUZUKI and Yoshikazu ARAKI; 「Pinning seismic retrofit of masonry constructions with application of polymer-cement pastes as bonding agents」, The 2013 World Congress on Advances in Structural Engineering and Mechanics (ASEM13), pp. 1-20, Sep. 2013.
- ・芳賀沼整, 早川真一, 石坂公一, 浦部智義; 「木造仮設住宅の計画特性に関する研究 一東日本大震災後の福島県内の仮設住宅を対象とした考察一」, 日本建築学会技術報告集, 第43号, pp. 1043-1048, Oct. 2013.
- ・木村健一, 鈴木裕介, Sanjay PAREEK, 荒木慶一, 藤倉裕介; 「放射能汚染灰及び電解水素水を用いたモルタル供試体の放射線量変化に関する基礎的研究」, 第3回コンクリート技術大会, pp. 51-58, Oct. 2013.
- ・鈴木裕介, 藤倉裕介, 木村健一, Sanjay PAREEK, 荒木慶一; 「放射能汚染灰体積線源を用いた超高密度モルタルの γ 線遮蔽性能評価」, 第3回コンクリート技術大会, pp. 43-50, Oct. 2013.

■濱田教授は、6月1日、郡山市教育委員会より郡山市社会教育委員を委嘱された。

■湯本教授は、6月8日、一橋記念講堂にて開催された特定非営利活動法人・産学連携学会 湯本長伯退官記念シンポジウムにおいて、「社会変革構造設計のための産学連携・異種異質連携学の役割とその確立に向けてー社会的変革エンジンをどう設計し伝えて行くのか」と題して講演された。

■齋藤助教は、6月26日、日本コンクリート工学会より、性能設計対応型ポーラスコンクリートの施工標準と品質保証体制の確立研究委員会を委嘱された。また、8月21日、十文字拓也君(出村研・M2)は同委員会の通信委員を委嘱された。

■浦部准教授は、芳賀沼整氏、滑田崇志氏と連名で季刊まちづくり39号(7月発行)「特集:復興まちづくり3年目の課題」に「福島の仮設住宅からはじまる集落形成、そしてまちづくりへ」と題して寄稿された。

■齋藤助教は、7月9～11日に開催されたコンクリート工学年次大会2013(名古屋)において、第35回コンクリート工学講演会年次論文奨励賞を受賞した。更に、本論文は査読で高い評価が得られた論文(採択論文589編中の17編)の一つとして、コンクリート工学誌10月号に掲載された。

■土方准教授は、7月10日、福島県より土木部指定管理者選定検討会の委員を委嘱された。

■土方准教授は、7月10日、福島県より福島県都市計画審議会都市政策推進専門小委員会委員を委嘱され、職務代理に選出された。

■浦部准教授と浦部研究室が計画・設計・建設に関わったログハウス仮設住宅群が世界建築「WORLD ARCHITECTURE」2013年8月号(No. 278)に「Wooden Temporary Housing Group-Building with Log Construction Using Fukushima's Cedar」として特集掲載された。

■土方准教授と土方研究室は、白河市金屋町・愛宕町・大工町通り景観まちづくり協議会より景観協定締結活動支援を依頼され、8月6日、10月1日、10月7日、10月8日、11月28日の5日間、景観まちづくりワークショップを開催された。

■玉木智基君(土方研・4年)は、8月8日、郡山

市より「輝く“まち”づくりプロジェクト2013」の委員を委嘱された。

■浦部准教授は、9月1日、日本建築学会大会建築計画パネルディスカッション「日常へ一見えない避難の現場から一」において、パネリストとして参加し、「福島における日常を取り戻す試み」を発表した。

■浅里教授は、9月、福島県建築安全機構が主催する「高校生が参加する地域防災授業」の一環として「地震のメカニズム」と題する講義を、福島工業高校、郡山北工業高校、会津工業高校の県内3工業高校で行った。

■若井教授は、9月4～12日、人間環境系国際会議(AicE-Bs2013)に参加のため英国に出張された。

■土方准教授は、9月20日、土木部専門研修の講師

式で奨励賞を受賞された。

■阿部圭君(若井研・M2)は、10月27日、京都女子大学で開催された日本インテリア学会第25回大会において、発表論文が優秀論文3編に選ばれ表彰された。

■バリーク准教授は、10月26日、第63回北校際参加事業 第18回「あかしゃ建友会」において、「オランダ・アメリカへ長期海外出張報告とコンクリートの最新研究動向」と題し、招待講演された。

■出村教授は、10月31日、ホテルハマツ(郡山市)で開催された第3回コンクリート技術大会において、「ロハスの工学を目指して」と題して、基調講演された。

■浦部准教授は、芳賀沼整氏と連名で建築雑誌2013年11月号に、東日本大震災連続ルポ2:仮住まいの姿no23「福島県における仮設住宅の移設や再利用」と題し寄稿された。

■速水准教授は、建築雑誌2013年11月号における特集:「建築家」が問われるとき～自己規定の軌跡と現在に、「建築士と建築家の間ー法・職能・住宅ー」と題し寄稿された。

■湯本教授は、11月1日、日本知財学会より最高裁判所・知的財産専門委員(第6期)に推薦された。

■若井教授は、11月3日、白河市より文化功労者表彰において自治功労賞を授与された。

■11月9日、鏡石町立鏡石第一小学校校舎改築工事現場見学会(設計者:陽田秀夫非常勤講師、施工:仙建工業株式会社)が開催され、学生16名の参加があった。

■工学部が幹事校を務めた第60回日本大学全国高等学校・建築設計競技(実行委員長:浅里教授、審査員長:渡部和生非常勤講師)の第2次審査会が11月9日、理工学部1号館にて開催された(p.6参照)。

■湯本教授は、産学連携学会の論文誌「産学連携学」第10巻第1号(11月発行)に招待論文として「産学連携・異種異質連携による知の生産 経世済民」と題する論文を寄稿された。

訃報:永年にわたり本学科で教鞭をとられた岩崎博元教授が、11月4日にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

教室ニュース

を依頼され、「復興まちづくりー都市計画の理念ー」と題して講話された。

■古俣甲太郎君, 前田建都君, 三代川昌礼君(市岡研・4年)は、10月4日、茨城県笠間市で開催された笠間稲荷門前通りポケットパークデザインコンペにおいて、作品名「和」が最優秀賞を受賞された(p.5参照)。

■10月18日、せんだいメディアテークで開催された日本建築家協会(JIA)東北支部主催第17回JIA東北建築学生賞で、13校15学科応募総数37作品中、樋口卓史君(浦部研・4年)の作品「都市の茶の間ー集落的建築ー」が優秀賞、星陽太郎君(速水研・4年)の作品「修験道資料館ー見る・歩く・感じるー」が奨励賞(東北専門新聞連盟賞)を受賞された(p.5参照)。

■10月25日、郡山市の福島県立安積黎明高等学校災害復旧工事の現場見学会が、福島県県中建設事務所との協力ので開催され、1～3年生の有志24名の参加があった(p.6参照)。

■中谷哲郎君(土方研・M1)は、10月26日、日本造園学会東北支部より、ポスターセッション表彰